

## アフリカ研究の成熟と退廃——●米山俊直

(京都大学教授)

去る5月末、名古屋の椋山女学園大学で第29回日本アフリカ学会研究大会が開催された。諏訪兼位、川田順造、板倉英世3氏の公開講演。そして2会場に分かれて総数72の学術発表。二日にわたる研究大会は非常な盛会で、懇親会も、大にぎわいであった。

29回という回数は、日本におけるアフリカ研究の長さを示している。それに先行する先輩たちの努力があり、それがこの地域研究学会に結実していることは言うまでもない。29年という歳月は、一人の人間が成人し、一人前の社会活動ができるようになるまでの期間である。この間までは、学際的なこの学会の性質から、できるだけ一会場で開催しよう、という主張が強かったのだが、報告者の数がこれほど増えては、不可能になった。

この盛況はアフリカ研究にとってまことに歓迎すべきことである。しかし、同時に自戒すべきところもある。

つい先日、講談社のアフリカ研究者への奨学金の選考に立ち会う機会があった。野間省一社長の遺志による、二年間の滞在費と往復の旅費を支給されるこの奨学金は、すでに優れた研究者を生む契機として、重要な役割を果たしてきている。驚いたことに、今年は一人的アフリカへの枠に九人の応募があった。それぞれの研究計画は良く練られたもので、推薦者も立派に業績を挙げてきている人達だった。その中から一人を選ぶことは、至難の業にみえた。しかし、堅実一方の計画をつぎつぎと読んでいて、私は一種のいら立ちを感じた。これらの応募者が、すでに先人の開いた道に沿って、同じようなことをしようとしているということに、いら立ちを感じたのである。既成の型にはまった優等生的な安全な計画。それは成熟であると共にひとつの退廃ではないか。

今回は広島大の国際関係論の院生で、他の「伝統的」人類学的研究と一味違う、南アフリカの反アパルトヘイト運動の研究者が選ばれた。その新鮮さが買われたのである。